

八重樫聖 ソロ『S/Cの隙間とカケラ』上演テキスト 『小間使い日記』より

■VOL.1

■靴偏愛の主人 9月14日 (p10)

主人の眼はあたしの編み上げ靴の上にしつこく注がれていた。

「他のもあるかい？」

「他の名前でございますか、旦那さま」

「いいやさ、他の靴だよ」

「はい、旦那さま、他のもでございます。」

「ニス塗りの？」

「はい」

「よく。よく塗った？」

「さようでございますとも」

「黄色い革のは？」

「持っておりませんの、旦那さま」

「そりゃあ持ってなくっちゃ、私があげようよ」

「ありがとうございます」

「私はね、女が自分の靴を磨くなんて、当を得たもんじゃないと思っているんだよ。まして私の靴なんでもっての外だ。私はね、女を大いに尊敬しているの
で、ねえ、マリイや、そういった事を大目に見とくことが出来ないんだよ。で、この私が、お前の靴、お前の可愛い靴、お前の大切な可愛い靴を磨くことにしよう。私がお前の世話をしよう。ねえ、よく聞き分けておくれ、・・・毎晩寝しなに私の部屋に、お前、靴を持っておいで、それを寝床の傍の小さなテーブルの上に置いとくのだよ、そして毎朝、私の部屋の窓を開けに来ながら・・・持ってお帰り。」

「どうしたのさ、私の頼みはそう大したことじゃないよ・・・何にしてもごく自然のことさね・・・ねえ、並外れたことじゃあるまい・・・それとも、そんなに並外れたことかしらねえ。ええ。」

「なぜ黙っているのさ。マリイ・・・何かおいしいよ・・・なぜ歩かないんだい・・・ちっと歩いてごらんお前の可愛い靴の動くのが・・・生きているのが見えるようにさ。」

「ああマリイ・・・マリイ・・・お前のかわいらしい靴を・・・おくれよ、すぐに・・・すぐに・・・すぐにさ・・・すぐ欲しいんだよ・・・おくれよ」

主人はひざまづいて、あたしの靴に接吻し、熱に浮かされているような、可愛さにぞくぞくしているようなその指で、靴をこね廻し、紐を解いた。・・・それから、靴に接吻したり、こね廻したり、撫でたりしながら、嘆願するような、泣く児のような聲で言った。

主人の眼と言えば、赤い筋のある二つの小さな玉が見えただけ。口一杯、石鹸のような涎に汚れていた。四日あと、主人が死んだ、私の靴の片方を嚼んで死んでいた。

■駱駝の私 9月26日 (p80)

いちいち、奥さんは二つの階段を上り下りさせる。下着部屋に座って、息をつく暇もありゃしない。・・・リ

ン、リン、リン・・・また立ち上がって出かけね ばならない・・・加減が悪かろうがおかまいなし・・・リン、リン、リン・・・このとこあたりは腰が傷んで、身体はおり屈ませられ、腹を振られ、怒鳴りた いくらいなのに・・・リン、リン、リン、・・・そんなことお構いなし・・・たとえ倒れかかりそうになっても・・・リン、リン、リン・・・さて呼ばれて、ちょっとでも行くのが遅かろうものなら、頭ごなしにやっつけられる。

「どうしたの？・・・一体、何をしているんだね・・・聞こえないのかい・・・唾なのかい・・・三時間も呼んでるじゃあないか・・・ほんとに手が掛かるっ たらありゃしない。いつも次のようなことが起こる。

「リン、リン、リン」

そら来た！バネではじかれたように椅子から飛び上がる。

「針を一本持って来ておくれ。」

あたしは針を取りに行く。

「よろしい・・・糸を持って来ておくれ」それで糸を取りに行く。

「よろしい・・・ボタンを一つ持って来ておくれ。」

またボタンを取りに行く。

「何だね、このボタンは。このボタンをいったんじゃないよ・・・解らずやだね・・・四号の白いボタン・・・大急ぎだよ。」

そこであたしは四号のボタンを取りに行く。心中どんなにか奥さんをのろい、怒り罵ったか・・・この往ったり来たり、上下している間に、奥さんの気はころりと変わって他の品が入用になるか、または何もいなくなる。

「いらぬよ・・・針とボタンを持って行っておくれ・・・暇がないから。」

■奥さん 9月14日 (p19)

「ねえあの娘や、これにはよく注意しておくれよ。大変立派なものなのだから・・・それに極珍しいもので、値段も高いものなのだからね、あの娘や。」

「あの娘や、知っておいでだろうが、このランプはね、そりゃあ高いんだよ。それに英国でなけりゃあ治らないんだよ。気をつけておくれ。お前の眼のようにね。」

「お前、きれい好きかい・・・あたしはね、きれいということには喧しいんだよ、他のことは気にしないが、きれいということになると、中々承知しませんよ」

奥さんの飲むものは、オブラート、シロップ、劇薬性水薬や丸薬だとか、葉ばかり、これは食事の度に、奥さんの皿の前に置くのを忘れてはならない品物。

■椅子の上 9月18日 (p71)

それをきっかけにまた憎まれ口が始まったのだが、それからそれとに仕切りなしにまるで下水からのように汚物の波がその女たちの口から吐き出される。店裏は、その悪臭に芬々としているよう。部屋は暗く、人の姿が奇怪な形に見えるので、それだけ強く痛ましい印象を受ける。明かり取りと言っては、狭い窓が一つきり、それも厭らしく苔に覆われた壁に囲まれた井戸のような湿気で汚れた中庭に向かって開かれている。塩粕とむれた野菜と塩漬けの鰯の臭いが四辺にこびりついていて、それが着物にしみ込んでくる。とても鼻持ちならない汚れた下着の包みのように椅子の上に重なったこの女たちは、銘々懸命に、犯罪を語り猥談を試みている。卑怯にもあたしは、その女達と調子を合わせ、笑ったり拍手したりしていた(が、心の内には、何か押さえ切れない、恐ろしい嫌悪を感じていた。吐き気が胸をひっくり返し、ぐんぐん喉元に迫り、口中をにちゃにちゃさせ、顛かみを締め付けてくる。逃げ出したかった、が、そうも行かないので、)馬鹿になって他の女達と同じようにだらしなく椅子にかかり、同じ身振りをして、聞きづらいその女達の聲をぼんやり聞いていた。実際、その聲は、流しや下水桶からぶくぶくばしゃばしゃ流れ落ちる洗い物の水のように。

■オルガン 9月18日 (p67)

可笑なことだがオルガンがないとあたしにはどうも祈れない。オルガンの歌を聴くとそれはあたしの胸に

満ち心を一杯にし、あたしを全くあるものにする、まるで恋する時のように。いつもオルガンの声を聞いていたら、あたしは罪を犯すようなことはしまい・・・この会堂では、オルガンの代わりに青色眼鏡をかけ肩に小さな黒いショールをかけたお婆さんが、内陣で調子の狂った肺病病みめくピアノらしいものを、危ない手付きで叩く

■姿見の前で 9月15日 (p46)

(化粧室に入ると、仮面は小気味よくはがれてしまう！あのかめしい壁が、とてもよく亀裂が入って砕け落ちること！)あたしは前におかしな癖の女に仕えたことがあった。朝肌着を着る前と、夜肌着を脱いでから裸のまま、姿見の前に立って、数十分間しげしげと自分の身体を眺め廻すのである。それから胸を張り、首を後ろに反らし、ツト腕を上へ挙げ、貧弱な肉片のようにぶら下がっている乳を少しばかり持ち上げ

「セレスチーナ、見てごらん、まだしっかりしたものだろう。」

肌着を脱いで被いや支柱が除れてみると、その身体はねばねばした液体となって敷物の上に広がって行きそう、お腹も腰もお乳も、しぼんだ革袋か空っぽのポケットのようにだぶだぶと脂だらけの皺ばかり、お尻は無性にぶかぶかして、とんと古海綿の穴の空いた表面、とはいうもののこんなに崩れた形の内に、どこかある色香が、それも、もの惱ましい色香が残っていた。美しかった女、恋に命を投げ与えた女の色香の名残とでもいおうか、老けて行く女の多くが罹る宿命的の盲目から、この女も亦、自分の取り返しのつかない衰頽に気がつかずにいた。身仕舞に念を入れ、媚態をつくして今日もなお恋を呼ぼうとする。してこの声に駆け寄る恋は？ああ、何というもの憐れさ！奥さんは時々、夕食前に息せき切って、少しきまり悪げに帰って来ることがあった。

「さあ早く、早く！遅れてしまった・・・着物を脱がしておくれな。」

どこから帰って来たのか、この疲れた顔付、黒く縁どった目、まるで何かの塊のように化粧室の長椅子にぐったり倒れるほど憔悴して、あたしの疑いを避けるため、呻いて言った。

「どうしたのかさっぱり解らないが、何でも突然、仕立て屋で卒倒したんだよ、それで着物を脱がせられたの、まだどうもはっきりしない」

あたしは、大抵気の毒に思っ、この馬鹿らしい逃げ口上を真に受けているような顔をしていた。

■モルモットをしめる 10月1日 (p142)

マリアンヌは日ましにあたしに打ち解けて来て、その夜は自分の少女時代。苦しかった若い時代の話をしてくれた。それから、カアアンのタバコ屋に女中奉公していた頃、ある病院の代診に操を破られた話もした。代診は、華奢な、痩せぎすの、金髪をした青年で、目は青く、絹のような、短い、先の尖った鬚をつけていたそうだ。そのうち身重になる。タバコ屋の奥さんはマリアンヌを追い出してしまった。若い身空を、お腹の子供を抱えて、大都会の敷石の上に投げ出されたのだ！男は金がなかったの、女は貧苦に追われた。とど、あの代診が医学校にヘンテコな口を見つけてくれた。

「ほんとに、ヘンテコな商売だったよ。ポラトワールで、私ア兔を殺していたんだよ。モルモットの子をしめていたのさ。面白かったよ。」

この思い出は、マリアンヌの厚い唇に、ある微笑を誘い出したが、それがあたしには寂しく見えた。一寸した沈黙のあと、あたしは尋ねた。

「で、子供は？どうなったの？」

マリアンヌは、曖昧な、漠然とした身振りをしてみせた。まるで、自分の子供の眠っている冥府の重い帳を取りのけようとするような・・・そしてアルコールでしゃがれた声音で答えた。

「子供をどうしたって言うのかい？」

「じゃ、モルモットの仔のように」

「そうさ」

そういってまた杯にブランデーを注いだ。

■父の回想 九月二十八日 (P108)

母さんが死んだ。今朝、国からの手紙で知った。母さんにはいつも打たれどうしだったが、でも、あたしは悲しい。あたしは泣いた。おもいさま泣いた。

づぶろくでんに酔っぱらった母親と一緒にいるのはやり切れなかった。それなのに、不意に今死んだと聞くと、心は寂しさに鎖されて、今までになく独りぼっちの感が深い。

(P110)

不思議なほど、はっきりと、自分の子供の時を思い出す。人生の辛い修業を始めた頃の周囲の事柄、人間なぞが目映る。この世では、余りに幸不幸が片寄り過ぎている。まったく人生は、不公平なもの。

ある夜、今でも覚えているが一まだ極く幼けない頃のこと一救助船の汽笛の音に目をさました。嵐と闇のうちに響く注意を呼ぶ音は、まことにものあわれなものであった。その前日から風は狂おしく吹き荒んでいて、港の浅瀬のところは、真白に波立っていた。無事に帰り得たランチは僅かなもので、そのほかは、紛れもなく危険に瀕していた。

父の魚場は、サン島の近海と知っていたから、母は大して心配もしないで、毎度の例によって、島の港に寄ったことと期待していた。でも、救助船の警笛を耳にすると、色を失って、ふるえて立ち上がった・・・急いで毛の大きなショールで私をくるむと、波止場の方へ飛んで行った。もう大きくなっていった姉のルイズと、それよりは小さな兄とは、母の後ろを口々にこう叫びながら追って来た。

一ああ聖母さま！イエスさま！

すると母も叫んだ。

一ああ聖母さま！イエスさま！

狭い小径は人で一杯。女もいれば老人もいる。子供もいた。船の凄まじい軋みの聞こえる岸の上には、あわてふためいた人々の影が、忙しげに動いていた。けれど誰あつて、波止場の上には立っていられなかった。風は強かったし、殊に波が、波止場の敷石の上に崩れ倒れては、大砲のような轟を立てて端から端まで洗い流していたのだから。母は小径を進んだ。(聖母さま・・・イエスさま！) そう叫びながら、浦づたいに燈台へ続く小径を進んだ。陸も海も真暗で、時々、遠く、燈台の光芒の中に、大きな波頭、濤のうねりが白く見えた。あたしは、身の動揺、吹き募る風をよそに、却ってそれにあやされていると云った具合で、母の胸の内に睡ってしまった。目ざめると、天井の低い部屋にいた。見ると、蔭った背や、陰鬱な顔、絶えず動いている腕の間に、二本の蝋燭に照らし出されて、一つの大きな死骸が急造の寝台の上に横たわっているのが目に入った。(聖母さま！イエスさま！)・・・顔は砕かれ、手足は血の滲み出た傷痕や青い斑点に被われた、硬ばった、長い、裸かの恐ろしい死骸、・・・それはあたしの父だった。

今でもその姿は目に残っている。・・・髪の毛は頭蓋に密着し、それに纏れた海藻は、とんと冠り物のよう。男達は、その死骸の上に身を屈めて、暖めたフランネルで皮膚を擦ったり、口から息を吹っ込んでいた。町長さんもいれば、牧師さん、税関長、水上警察のお巡りさんなどもいた。あたしは怖かった。襟巻きからもがき出ると、湿った敷石の上のその人達の脚の間を駆け廻って、父を呼び母を呼びはじめた。隣のおかみさんがあたしを連れ去った。

■ジョルジュの思い出 10月6日 (p163)

ジョルジュさんは長椅子の上、あたしは、小さなテーブルの傍に腰を下ろしていた。テーブルの上の笠の下で燃えてるランプが、二人の周りに淡紅色の和だやかな光を様わしていた。二人とも口を利かない・・・いつもよりジョルジュさんの目はキラキラしていたけれど、でも、心はずっと静かなようだった。ランプの淡紅色の反映が、顔色を輝かしく染め、光の中に、その美しい顔の線をくっきりと描き出していた。あたしは、針仕事をしていた。

(p172)

あたしの接吻は、何か恐ろしい、酷く罪になるようなものを持っていた。ジョルジュを殺しつつあると知って、あたしは、自分も、同じ幸福、同じ病気に死のうともがいた。思い切り良く、あたしは、彼の命と自分のとを犠牲にしていた。さらにさらに、二人を恍惚の底に引き入れる激しい粗々しい興奮を以て、あたしは、ジョルジュの口から、死の息を吸い死を呑んだ。そして、その病原菌を自分の唇に塗りたくった。ジョルジ

ユが、常より酷く咳き込んだことがあった。と見る間に、その唇には、汚い血に染まった唾が、もくもく泡立って来た。

一頂戴！頂戴！頂戴！

あたしは殺人者のようにががつと、生の興奮剤でもあるかのようにそれを呑み込んだ。

■セレスチーナの生立ち 9月28日 (p112)

この時から、母はお酒に身を浸すようになった。最初は、鰯缶詰工場で働こうとしたのであるが、何しろいつも酔っていたので、どこもぢきお払い箱。それからは、陰気な口喧しい人になって、ただ酒浸りになっていた。そしてブランデーがすっかりまわると、子供達を殴るのであったが、よくまア、あたしを殺さなかったことと思う。

あたしは出来るだけ家にいないようにした。毎日、波止場で悪戯をしたり、畑を荒らし廻ったり、干汐時には水溜まりの泥の中をガバガバやったりして、日を送った。またある時は、ブロボ街道の、雑草の茂った丘の奥、海風も通らぬ、灌木の密生した場所、野薔薇の間で、男の子達と悪戯をした。

酒代を得るために、母は身を持ち崩した。夜になると、決まって、家の戸を叩く微かな音がした。水夫が入ってくる。部屋中を塩と魚の強い臭いに満たしてしまう。

十歳の時に、あたしはもう純な者ではなかった。母の悲惨なお手本に依って、「恋」の手解きを受け、男の子達と戯れた悪さに依って毒され、あたしは肉体的に酷くませていた。十一の年には、はや青春の悩みを知る身になっていた。十二歳には、すっかり「女」になりきって、そして最早、無垢の身では無かった。策略も無く、無邪気にそうした罪へ導かれて行ったのだ。ある日曜の、大彌撒の後、年とった、毛むくじゃらな、牡羊のように臭い、顔といたら、無精髭に埋まっている、鰯缶詰工場の職工長が、濱づたいに、サン・ジャンの方へあたしを連れて行った。鴉が巢食ったり、時には水夫が海で拾った漂流物を隠す、断崖の蔭。男の名前は、クレオファス・ビスクイユという変な名だった。醜男で、粗暴で、嫌な奴で、それに暗い岩屋へ四五会も連れ込まれたが、それなのに、どう云うものか、嫌ったり呪ったりする気になれない、それどころか、喜んでその思い出に耽り、感謝の念さえ味わう。二度とあの海藻の匂いのうちの男を見る事が出来ないとせば、心からの名残惜しさといったものを味わう。

■VOL.2

■「的のない外の所」 あたしは常に～そうして時間が経って行く

P190

あたしは常に何処か外の所と焦っている。「的のないこの外の所」を空しい詩情ときわめつかぬ幻のような夢で飾って、そこに、愚かな望みを抱くのである。行けども行けども同じこと・・・彼方、塵煙の立ちこめた地平線に目をやれば、青く、赤く、みづみづしく、さながら夢のように、光り煌めき軽やかである。彼処（あそこ）こそ、生きて幸福の土地なれと、近づいて見れば・・・さて何もなく、砂と小石と、壁のように陰惨な丘があるだけ。外には、何一つありゃアしない。そしてその砂の上の、その小石の上の、その丘の空は灰色に閉じて、どんよりと重苦しく、目も暗澹として、煤煙のように濁った光が落ちるばかり・・・何もない・・・求めて来たものは何もない、いや・・・何を探し求めて来たのか、自分でも知らないのだ。自分が何者であることさえ知らないのだ。

P191

元来、召使いなんでもものは、普通の人間じゃアない。社会的の人間じゃアない。くっつけ合うことも、積み重ね合うことも出来ない破片で出来上がった、いわば、ちぐはぐの何か。いや、もっと悪い何かだ。奇怪な人間の雑種。生れ出た下層階級にも属していないし、といて、現在生きているブルジョワ階級にも属してやしない。下層階級を見捨てて、素朴な力とさっぱりした血を失い、ブルジョワ階級からは恥ずべき悪徳ばかりを得て、これを満足させる手段は得られない・・・身に染むものは下劣な感情、卑怯な恐怖、罪になる

ような欲望、それも、見栄や飾りのない、金があるからといった言い訳に立つ富のないもの。汚れきった心を抱いて、このブルジョワの世界にいと、腐敗した茶捨場から立つ恐ろしい臭気を呼吸しただけで、永久に、精神の安定を失って、遂には自我の形式までも棒に振ってしまう。この表面ばかりの人間の間に、幽霊のような身をさ迷わせたのちの、あらゆる思い出の奥底に、見出すものはただ塵埃一苦しみだけ。

P192

ここには何にも起らない。どうもこれにはやり切れない。この単調さ、この変わらぬ生活。ここを出たいものだが・・・出る？何処へ？どうして？どうにも解らなくなって、結局、留まってしまう。

P192

奥さんは相変わらず疑い深くって、几帳面で、無慈悲で、欲張りで、感激もなければ、冗談もなく、気紛れもなければ喜びの影一つ、その大理石のような顔の上には映さない。旦那は、朝飯を済ますと、鉄砲を担いで、ゲートルをつけて、猟に出かけ、夜に入って帰って来る。もうあたしに靴を脱がしてくれともいわない。そして九時には寝てしまう。相変わらず、不格好で、滑稽で、ぼんやり、ブクブク肥って行く。

この家の内でおそろしいのは、その静寂。どうもこれはやり切れない。よく暗い廊下の冷たい壁にそって、自分をまるで、妖怪か幽霊のように思うことがある。この家の内は息苦しい・・・でも務めてしまっているしまつ！

唯一の楽しみは、日曜日のミサの帰りに、食料品屋のグアンのおかみさんのとこへ寄ること。少なくとも、そこでは、みんな一緒になって、喋ったり、道化たり、騒いだり、メレ酒を引っかけたりする。まア幾分か、命の幻影があるというわけ、・・・そうして時間が経って行く。

Act 2

■クレエルの惨殺 p194,195

(今日、食料品屋で、昨日のこと、) 村の猟師達が、ライオンの森の中、野薔薇や枯れ葉の間に、むごたらしくも手込めにされた小娘の死骸を見つけだしたといふ話を聞いた。土地の人が小クレエルといっている娘。少々足りない娘だったが、でも温しい淑やかな娘で、まだ十二にもなっていなかった。クレエルはずいぶんむごたらしい死に様で、短いヒースの樹の間の、踏みにじられた場所には、尚、犯罪の痕跡が残っていたそうだ。(死人の、殆ど腐爛し尽くしかかっていた模様から見るに、犯罪の凶行されたのは、少なくとも、一週間前のことらしい。)

小クレエルは、一日中、森にいた。春になると、その森で、黄水仙や鈴蘭やアネモネを摘んでは、可愛らしい花束をつくって、町の婦人達に売りに出ている。日曜には、編笠茸を探し求めて、市場に売りに出た。夏は、種々な茸や、花を摘みに行った。けれど、何も摘む的もない今頃、どうして森になんか行ったのだろうか。

Act 3

■気になる男、ジョゼフ P204-5

どうも気になる男が一人ある。(15年前からこの家にいる)

奥さんに信を得ている反猶太観の馭者で庭師のジョゼフ、あたしはあの男に信が置けない。P206

ゆっくりと滑るように行く歩き方も、あたしには気味が悪い。(鉄丸でも引きずっているような・・・徒刑場か、僧院か、・・・恐らく両方である) 背中も怖いし、あの幅広い力の籠ったあの頸も怖い。P204

あたしがジョゼフの内に新たに、そして深刻に見出したもの、それがあたしの心を転倒させる。

肉感的な、キュッとさせる、恐ろしい、陶酔させるような空気があたしの

心を転倒させる。。
立たせる半ば恐怖を持ち、半ば牽かれて行く。

ジョゼフは、兇行のあの土曜日、ライオンの森へヒースの土を採りに行っていた。

○迷宮入り 貧乏な小娘の惨殺、P209

貧乏な小娘の惨殺なんてことは、そう血を湧かすもんじゃない。結句、この事件は迷宮入りとなって、他の多くの事件同様、闇から闇へ葬られてしまうに違いない。P209

(——ねえ、ジョゼフ 森で小クレエルを手籠めにしたのは、お前さんだろう、エ おい p211
——ジョゼフ、何日だっけね、お前さんがライオンの森へヒースの土地を採りに行ったのは、覚えている p212

そのユダヤ人嫌い、たえず彼等を焼き殺してやるなんていっている嚇しは、ただの大風呂敷を広げているに過ぎない。これは政治上の問題。あたしが知りたいのは、もっと確定的なもの…)

——早くやっちまひよ。ジョゼフ。すぐ殺しておしまひよ…
そんなに苦しめるなんて、酷いじゃないか。

○家鴨の断末魔 (P214

家鴨をしめる時には、ノルマンデイの習慣に依って、首にピンを刺してやっつける。苦しませずに、一息に殺せば殺せるのに、ジョゼフは、巧みにその断末魔の苦痛を長引かして喜んでいる。自分の手の内で、鳥の肉が顫え、心臓が鳴るのを喜ぶ。自分の手の内に、鳥の苦痛、臨終の顫え、死を、段々と眺め、計り、考えるのが好きなのだ。) 片手に家鴨の頸をつかみ、片手で、ピンを頭に打ち込み、のろく、規則正しくそれをぐるぐる廻す。丁度、珈琲でも挽くよう。ピンを廻しながら、ジョゼフは、荒々しい喜びに充ちていった。鳥は、翼を出して、バタバタもがいた。頸が、凄惨な螺旋状を呈して振れ、羽の下の肉がピクピクすると、鳥を台所の敷石の上に放り出して、両肘を膝に置き、顎を手の平で支えながら、満足しきったような片目で、鳥が身を顫い、痙攣し、黄色な脚で地をかくのを眺めはじめた。

——うんと、苦しめなくつちア…苦しめば苦しむだけ、血がいい味になるんだぜ

——こいつが面白いんだ。俺はこれが好きなんだ。」 P215

——ねえ、森で小クレエルBを手籠めにしたのはお前さんだろう…そうに違いないや、そうだと、…お前さんよう エ)

○「シェルブールのカフェ」P223 原田の声 p223

「俺はシェルブール生まれなんだよ。水平や兵隊や愛国者達がうろついていて、叫び喚いて、喉を干涸びさせている。港よりの素敵な場所にある小さなカフェでも手がけりゃ、顫や二千の金を手にするな、雑作ないことなんだ。ただここに、女が一人欲しいんだ。」

小ざっぱりしたカフェ、キラキラ光るカフェ、勘定台の大鏡の後ろに、アルザス・ローレン風の美人が立っているんだ」

○ジョゼフの抱擁 P225

(——俺は、お前が、小さなカフェにいるところを夢に見ているんだ。そして俺の血は煮えくりかへるやうなんだ。

——それに、金は一万五千法以上あるだろう…この金が生んだ利子はちょっと解らねが。おそれから、あれだの、これだの、宝石だの、おい、お前、ほんとに幸せになるんだがな、ええ、そのカフェに来てくれさへしたらよ。

その体は、あたしへの情欲で震えているのが、感じられた。その気さえジョゼフにあれば、少しもあたしを

藻掻かせずに、押さえつけ、息の根を止めてしまひ得たろう…だがジョゼフは自分の夢を語り続けた

小クレエルの口を被い、喉を絞め、惨殺したあの手で、あたしを抱きしめ、小クレエルの血みどろな傷口に接吻したあの口で、あたしに繰り返し繰り返しいった。P226

Act 4

■シアリゴ夫妻 p5-6

シアリゴ、身には途轍もないフィリップ風のプロックコートを纏い、襟に結んだカラーやネクタイは、思い切った1830年代もの、とても素敵で膨らみを持った天鵝絨のチョッキ、見てくれがしにひけらかす宝玉。とり出す葉巻は、金紙に捲いてあった。でもつけ焼き刃の悲しさ、

(鈍い手足の働き、ギゴチない身振りが、角のとれない肩のつけ根、コツコツとした間接) 俄ごしらえの新し過ぎ。

——天鵝絨や繻子をふんだんに付けて見るがどうもいかん。いつまでたっても間抜けな面をしている。どっか不自然なところがあるて・・・」P6

ケバケバしい化粧をし、髪の毛は真っ赤に染め過ぎ、ベラ棒に大きい宝玉をつけ、馬鹿値の絹を纏い、まるで共同洗濯場の女王か謝肉祭の皇后様。

(陰では、小ッ酷く嘲笑されていた) P6

——離縁て奴は少なくとも姦通を消滅させてしまう取り柄はあるよ。姦通、こりゃアもう時勢遅れの悪戯さP9。

○招待者 P9

伯爵夫人フェルギウ(離婚者) その友人ジョゼフ・ブリガール、経済学者、代議士。男爵夫人アンリ・ゴクスタイン(離婚者)。その友人テオ・クランプ、詩人。男爵夫人オト・ブュチンゲン、その友人子爵ライレイ、

倶楽部員、運動家、賭博家、イカサマ師。ド・ランブユール夫人(離婚者)。その友人チエルセラ夫人(目下離婚手続き中) ハリーキンバリー卿、象徴派音楽家、熱烈なる男色家、その若き友人リュシアン・サルトリ、女のように美しく、しなやかで、葉巻のように細ッそりした金髪青年。学士院会員ジョゼフ・デュボン・ド・ラブリ、淫猥なる古銭学者、同会員イジドール・デュラン・ドラマルヌ、肖像画家ジャック・リゴ、心理小説家モーリス・フェルナンクール、社会記者プール・デソワ

皆、出席を承知した。

——シアリゴ家ですって？

立派な家柄なんですか？P10

○言い争い

(一週間前から、家の内は上へ下への大混雑。部屋は殆ど新しくしてしまひ、夫妻は互いに意見を異にして、言い争った。

——馬鹿らしい、皆、淫買の家にでも来たと思うぜ、そんなことすりゃ、早速、奴等に馬鹿にされるから。

——なんとでもおいひなさい、あなたと来たら、ちっとも昔と変りやアしない。いつまで経っても、ビアホールの無頼漢なのね…ああ、もう、うんざりしちまふ！

——そうか、いいとも、ああ、わかれゆぢアないか、エ、狼、別れようぢアないか。

——少し口を出さないでいて下さい。馬鹿らしいことばかりいって、頭が呆然としてしまふぢありません

んか。

——よし、よし、さうだ、さうだ、まあしたことも無く済ましたいもんだな。社交界の人になつてことが、こんなに困難な、骨の折れる、面倒臭いものだとは、知らなかったよ……昔の無頼漢のままの方がよかったようだな。

——ああ、いつまでもそうした根性はのは、よく解っていますよ。あなたは、女の身のことなんか、一寸も考へて下さらないんだ。)

P18

——ほんとにトンチキな女だなア。あの身装ったらありゃアしない。彼奴のお蔭で明日から巴里中の笑いの種になるんだ。」

——お馬鹿チョだね！あのパンの丸菓を種に明日は酷い目にあうこったろう。P30

——まるで溝鼠の寄り合いだねえ」

——（あなたが、悪いんですわ、）太い指の間で汚らしいパンを丸めてばかりいて、変だったらありゃアしない、恥ずかしいじゃありませんか！」

——一体お前の青い着物は何だい？お前の薄笑いは何だい、サルトリーに対してのヘマはどうしたんだい。それも俺が悪いのかい。」

だが、翌日フィガロ紙に、この晩餐会のこと、二人の趣味、精神、典雅なこと、その交友関係を、矢鱈に褒め上げた記事の出ているのを読むと、何もかも忘れてしまって、自分達の成功のことばかりを話あっていた。

——誰だって欠点はありまアねえ！

○二大部分 p16-17

p18

宇宙を別って、彼らは二大部分している。一方は正しいもの、他方は荘でないもの。この二大部分が、更に細別され、また更に区分されていく。晩餐に行っても差し支えのない家、夜会にだけ出席していい家。晩餐会に行つてはいけないが、夜会に行く分なら構わない家。食卓に招き得るお客と、ただ特定なある場合に限り、客間へだけ通すことの出来るお客、それからまた、晩餐に招ぶことも招ばれて行つてもいけない家とか、午餐に招いても差し支えないが、晩餐は遠慮する家とか、田舎だから晩餐を受けてもいいが巴里では受けてはならない家、いや、あること、あること。

Act 5

■事件の放棄 P33、

もう問題になっていない。予想通りに、事件は放棄されてしまった。ライヨンの森とジョゼフだけが、永久に、その秘密を握っているというもの。あわれな少女の死骸についても、やがて、森の草叢に死んだ鶉の死骸ほどにも云々されなくなる。

Act 5

■金持ちの犬 p33-34

——病気の子にスープを作ってやるんですから、肉を少々下さいナ

肉屋は、貧乏な老婆には、銅の鍋に投げ込んであつた細切れの中から、半分骨の、半分脂の、ひどいところを選び出し『15スウ』で売り、奥様の犬には、真っ赤な上等の肉片を長く切って、投げてやる。ああ、金持

ちの犬！こりゃア貧乏人じゃないんだ。

Act 6

■ポール・ランソン教区の司祭長 p40

(ルアンの新聞記事が噂。滑稽で突拍子もないこと。このあわれな日記を、明るい笑ひで賑はすことも出来よう)

○司祭長の弁舌 p42

「皆さん、地上樂園は、誰がなんと言おうとアジアにあったんだ、アジアに。そこには、昔、雨も降らなければ、霞もなく、雪も降らず、雷も落ちなかった。そのアジアにあったのだ。万物は青々として、香気を放ち、花という花は、まるで樹のように高く、木はまた山のように高かった。然し、今ではアジアには、何もない。我々の犯した罪のために、アジアには、支那人、交趾支那人、トルコ人、黒ん坊の異端者、黄色の邪宗徒の他には何もいなくなってしまった。そいつ等は、尊い伝道者を殺し、地獄に堕ちて行く奴輩だ」

○教会の石像 p46

(——司祭さま、この境界に悪魔がいるのです)
——教会の上に真裸の男を見たのです
——わたくしは、何もその男が信者だとは申しません。だって石で出来ているんですもの」
——石なら、裸じゃアないと仰有るんですか。」
——その石の男は、あなたがお考え以上に裸なのですよ、あの・・・あの、恐ろしい・・・あの、あれを・・・
ああ、牧師さま、私に汚らしい言葉を口にさせないで下さい。」
——しかも幾世紀か前から、あすこにあったのです・・・あなたの教会を汚して・・・女であり、尼僧であり、貞操の誓を立てたこの私がそれを見つけて、貴方のところへ、《司祭長さま、悪魔が教会におります》って、叫びにこなければならないとは・・・」

夜は、月がなくて暗かった。高く教会の上、悪魔や聖者の晦渋な石像が交錯していた。司祭長は、金槌と鑿(のみ)と灯籠を持って梯子を登り、金槌を振った。

P50

—すべての罪業より
—主よ、我らを救い給え
—淫欲の霊より
—主よ、我らを救い給え
—主よ、我らの願いを聞き入れ給え
—最も聖なる母よ、最も純潔なる母よ、不可侵の母よ
—あ々、豚め！豚め！司祭長は、「我らのために祈り給え」という代わりにこう唸った。

司祭長は、この淫猥な聖像に一撃を与えた

銀器磨き P53

その銀器を前にした奥さんの眼！あたし達の手で洗されるその銀器の前での奥さんの眼！こんな貪欲な相をした女の眼は、見たこともない・・・

奥さんの銀器と、シェルブールの小さいカフェとの間には、全体、どんな関係があるのだろう。何故とは知らないが、ジョゼフの一寸した言葉もあたしの身を顫るわす。P54

Act 7

■遊蕩漢のグザヴィエさん p76-79

○タルブ夫人の叱責 P57

p57

——セレスチーナといふのだね。ああ、あたしは、そんな名は嫌いだよ。英語でマリー！ おぼえておおいで、マリー さう、この方がいい。

——マリー お前肉付きはいい？

——なに、お前の髪は！ すぐお結いお直し、野暮すぎるよ、

——その着物は、お前の一番いい着物

——お前の晴布は感心しないね。あたしのをあげるから、お前に合ふやうにし立直すといいよ。それから下着は、

(夫人はあたしの裾をもち上げてまくしたてた)

——ああ、さう、よくないね。それから肌着は、どう？

——奥様のおっしゃることは、どういふことかあたしにはわかりかねます。

——肌着をお見せ！ もっとおいで！ ついでにちょっと歩いてごらん！ もう少し…後戻りして…そっち向いて…歩き振りもいい…

——まあ、この肌着と靴下は、厭だね、このコルセットって、なんだい……こんなものは、家では見たくないね。こんなもの、着て貰いたくないよ。

——これを御取り、…マリー…どれでももっておいで…少しは繕ったり、直したりしなければならないのもあるけれど…まあ、好いやうに自分でおし。お前に似合いの衣裳、みんなお取り！

——さあ、これからグザギエの部屋へ行きます。あたしの息子なの。マリー。

——あの子は、少し性急だけれど、でも、可愛いところがあるよ。

…お前、ズボンの畳み方知ってる？ グザギエは、何よりもズボンを気にするから。P61

(前に共和党の代議士の家に奉公したことがあるが、その人は、坊主の悪口をいふのだが、宗教とか、法王とか、尼僧といった言葉が嫌いで、その説によると、教会とふ教会、修道院などは、一切、打ち壊さなければならなかった。……ブルジョアの輩は、いずれもみんな偽善者で、卑怯者、鼻持ちならぬ奴ばかり) p67

○グザビエさん p70

——お前 素敵だねエ。いつからいるんだい？ ここへ おいで！ p71

——親仁やおふくろ？ それが何だい！

——俺は無政府主義者なんだ…宗教…ジェズイト教…坊主…もう結構、それが、何だい、親仁やおふくろのやうな人間がでっち上げてる会が、なんになる？ ええ、そんなもの用に立ちやアしねえや！ P72

——とんでもない、親仁が！親仁が！

(あはははは、あたしも笑っていた) P73

何よりも不幸なことは、グザビエさんに情の無いこと。あの御用以外には、あたしは無いも同然、御用が済めば、勝手にしろとばかり、微塵あたしにもくれない P76

荒淫な男の出来心のままにどんなことも受け入れ、いやある時は、こちらから持ちかけさえしていたのに、

その男の心へ少しも愛情の痕跡を残すことが出来なかったことは、かえすがえすも口惜しい。P77
とはいふものの、あたしは、この道楽者を、獣のやうに、身を献げて愛したものに違いない。

P78

——お前、5ルイ持っていない？』

——それだけでもいい、その90フランを持っておいで』

——そんな泣き言を聞かせに、俺に90フラン貸してくれたんなら、このお金をお返すよ』

大急ぎで、若旦那は衣服を着替えた。そして接吻もくれず、一言も言わずに出て行ってしまった。

○主人夫婦とあたしの罵詈雑言 P80

あたしは、この家の恥辱と、表に出ているものとを楯に、夫人を馬鹿にしてやった。そして、まるで汚れた雑巾を投げっこするように、罵詈雑言を言い合って、喧嘩口論するさまは、とんと裏店の山の神よろしく。

——うちをなんだと思っているんだい？淫売宿にでもいるつもりなのかい？

——ほんとに、お宅は清潔ですよ。ご自慢になれましょう。そしてあなたは・・・いかにもお清潔でございますよ。・・・それから旦那は？おほほ、おまけに町内であなたを知らないものア、ありゃアしない。お宅は？・・・魔窟！魔窟にだってこんな汚いのはありゃアしないや！

——（放蕩息子に貸したお金を返せ！）お前たちやア、揃いも揃って泥棒だ。皆、詐欺師だ』

——お前立ちやあ、悪い評判がしてもらいたいんだね・・・覚えている、泥棒め！」 p86

Act 8

■ヌイイのノオトルダム・ド・トラント・シ・ドルトルの尼僧たちの家、 婦人救済所 P87

○鐘の音 P87

ああ、鐘の音はなんという優しいものだろう！あの音は人の心のうちに、遠い昔の、忘れはててしまったいろいろのことを思い浮かばせる。鐘の音を聞くと、いつもあたしは目を閉じて耳を澄ます。すると、恐らく見たこともなかったような景色、または、幼年、少女時代の移り変わりの思い出が侵み込んでいる懐かしい種々の景色が脳裏に浮かび出る。砂浜に続く野原に、晴れ着を来た村人が、三々五々、ゆるゆると歩いている。ブルターニュの角喇叭が鳴り響く・・・これは、格別、陽気な音じゃアない。寧ろ、恋のようにうら侘しくもある。しかしあたしはその音が好き。巴里では、噴水の番人が吹く角笛と電車の煩い喇叭の音のほか聞けやしない。

○尼僧たちが、あたし達を餌にする p93

だれ憚らぬ、いけ図々しさであった。あの連中のやりかたはいかにも簡単で、それを隠そうとさえしない。自分達の役に立たない女には口を当てがいが、幾分でも家に置いて、利益になりそうな女と見ると、押さえて置いて、その能力、労力、無邪気さを酷き使う。基督教の慈善の骨頂は、自分の方から食料を支払う召使いや女工を見つけて散々、使いまわした上、わずかばかりの臍繰りを、平氣の平左で捲き上げること・・・そして、ご費用の方とはいうと、こりゃア御均等にとりあげる。

——もう暫くの辛抱ですよ。いい口があったらば、と、いつもお前さんのことを心掛けています、飛び切りの口を見つけてあげようと思ってね、方々、探しているんですが、お前さんに適当な、相応しい家が出て来ないので、ねえ・・・」 P92

○白い影 p93

みな寝静まったと思われる頃、白い影が浮き上がるのが目につく、すると笑い声、囁きなどが聞こえて来る。寝室の中央、天井から垂れているランプの、濁った、震える明かりの下に、あたしは幾度となく、獸的な、けれど侘しい卑猥な情景を目撃した・・・尼達は、見ざる、聞かざるをきめこんでいる。醜聞の外に漏れるのを恐れ、何も知らない風をして、この惨状を黙過した・・・さて費用は、きちんきちんと取り上げる。(p 93)

○婢僕というもの P95

婢僕というものは、どれほど窮迫されているか、いかに烈しい搾取永久的の犠牲になっているかということ、世間の人には気づかない。主人とか桂庵とか救済機関とか、どれも見な、あたし達を食い物にする。そして、誰も、他人のことは顧みない。みんな、自分より貧しいものの困窮に拠って生き、脂ぶとり、面白がっている。場面が転じ、背景は変わっても、人間の煩惱欲念は同じもの。結局、あたし達のような女は、何処へ行こうが、何をしようが、いつもその結果は被征服者。貧民は、富者が刈り取る歓びの収穫、生命の収穫を齎す人間の肥料。しかも金持ちは、われわれに対して実に惨たらしく悪用する。

(今日は、もう奴隷制度は存在しないといふ。ふん、冗談いっちゃアいけない。ぢやア召使は、奴隷でナクって、いったい何？

隷属的境遇にある、道徳的墮落、不可避の腐敗、嫌悪から生まれた反逆なぞのあらゆるものを帯びている事実上の奴隷。召使はみな、主人の家で不行儀を覚える。初奉公の当座は純真で無邪気なのが、たちまち腐敗してしまう) P95

○ストリキニーネ p98

仮に一人の料理女があって、これが毎日、主人の命を握っている掌中に一塩のかわりに砒素を一掴み・・・または酢のかわりにストリキニーネの一滴をとったら・・・それでいいんだ・・・ところが、それが出来ない・・・ああ、あたし達の中には奴隷根性があるに違いない！

○ボニファス尼との罵り合い (P100-101)

ノートルダム・デ・トラント・ド・シ・ド・トルを飛び出すには、ずいぶん骨が折れた。ある日、ボスニアス尼に、今夜にも出て行きたいからと告げた。

——お前さん、70フランばかり、借りがあったねえ・・・兎も角、あれを片付けて行かなければ。

——え、そりゃなんで払うんです。あたしやア一文無しですよ。嘘と思うなら、何処でも探してご覧なさい。

——何！あんまり馬鹿に唾でないよ。朝から晩まで畜生同様に働いてやって、うんと儲けさせて、おまけにこっちにやあ、犬も喰わないようなものをあてがっておいて、金を出せとは何だい、ふざけんない。

——さあ、やるならやってみてご覧。行李に指一本でも指したが最後、すぐ巡査を呼んで来るから・・・坊主の汚い猿股を繕ったり、貧乏人のパンをくすねたり、毎晩、寝室のあのさまに幾分でも儲けるのが、信心だっ

ていうんなら。

——しかも、毎晩の寝室の出来事をちっとも知らないんだって！さあ、このあたしの前で、そう云えるなら云ってみろ！お前さん達は、幾らか儲かるもんだから、あれを煽り立てているんじゃないか、そうだと、自分達の儲けになるもんだから！

——エエ、オイ、それが宗教だっていうのかい、監獄と私窩子宿が宗教なら、宗教なんか真平御免だね。アア。おい、行李だ、解ったかい、行李を出しとくれ。

□大尉の申し込み p107

大尉はあたしをじっと、ひねくれたような、そして色っぽい目で見まもりながらいった。

—そりゃアあんたの胸一つでナ。

—セレスチーナさん、まアお聞き。お給金は月35フラン、主人と同じ食卓じゃ、主人と同じ部屋じゃ、それに遺言、それでどうかね・・・エ？

○大尉とジョゼフ p109

大尉にしようか、ジョゼフにしようか、これにやあ、はたと当惑した。こうした状況にある幸運を握って、女中兼帯の妾として暮らそうか、言い換えれば、痴鈍な、卑しい、浮気男に身を任せて肩身狭く生きようか、でなくば、結婚して、他人の干渉を享けない、辛い目も見ず、自由な、相当の生活をするか、あたしの夢の一部分は、遂に実現されようとしている、こうした夢がもっと、立派なものであってくれば、とは思っている。けれど、何れにしても、いい目の少ないあたしのような女の身になってみれば、今や、家から家へ、寝台から寝台へ、人から人への永遠な、単調なぐらぐらした生活以外の何かがやって来たとしたら、こりゃア、慶ばねばなる)

Act 8

■ジョゼフとの対話2「

110

ジョゼフに対するあたしの感情は全く別なもの。(・)あたしの心を押えつけ、我が物にし、しつこく付き纏っている。あたしを悩ましたり、うっとりさせたり怖がらせたりする。そりゃア確かに醜いことは醜い。恐ろしいまでに凶暴で醜い。とはいえその醜さを分解して見ると、そこに殆ど美ともいふべき、美以上の、美を超越した、元素とでもいふべき素晴らしいある物がある。(・・・)こんな男と一緒に生活することは、危険であり、困難であることは、百も千も承知、でもそれだけに、目を眩ます強い力で、あたしを牽きつける。・・・少なくとも、あの男は、多くの犯罪を犯し得ると同時に、また恐らく、善事を為す力を持っている・・・あたしにははっきり解らない・・・不可解な神秘的な引力ばかりでなく、ジョゼフはあたしに対し、苛酷な、烈しい、力強い、??的な魅力を持っている。そしてこの魅力・・・そう、この魅力はますます、あたしの神経の上に働いて、あたしの受動的な、また屈從的な肉体を征服して行く。(・・)精神的にも、性的にも、あたしを全部捕らえ、気づかれずに心の底に眠っていた、どんな恋も、どんな情欲も今日まで目醒ますことのなかった未知の本能を顕現してくれた。

——お前、俺にそっくりさ、セレスチーナ、魂がそっくりなんだ、魂が似通っている」P111

現在のころばかりではなく、過去の心をも、ジョゼフは奪ってしまっている(・・・)

過ぎし昔も、今は、全ての醜汚または艶美な面影を抱いたまま遠ざかって行き、色褪せ、消えようとしている・・・クレオファヌ、ビスクイユ、ジャンさん、グザキエさん、ジョルジュさんさへもが、(・・・)

自ら飲んで熱情的に、自分の幾分または全部を、揮える肉体を、悩む心を任せたこれ等全ての人たち・・・

それまで皆すでに影となった。あるかなきかの思い出、やがては、とりとめもない夢、触れることのできな

い現実、忘却、…けむりとなり、無となって、忘却の底に沈んで行く漠とした影となった！

ジョゼフの罪深さうな口許、悪徒らしい眼、豊かな肉付きの頬、

——あたしは自分に白状しなけりゃならない、…自分に叫ばなければならない… あたしは、ジョゼフに惚れている！

——わかってるかい… まづ店を塗り替えて、新規のようにしなくちゃ…うんと、立派にしてね、金文字で「フランス軍人歓迎」という新看板を上げるんだ…」

ジョゼフは、あたしのことはいはなかった(…) 心変わりでもしたのかしら？ 小さいクレールを汚辱したといふ、あたしの匿すことのできない疑念が、二人の間に、水を指しはしなかったろうか？

——ジョゼフ お前が行ってしまったら、あたしここには辛抱しきれないよ。…今では、お前に、すっかり慣れてきたんだもの…

——お互いにもう会へなくなっても、お前、辛くは思わない？ ジョゼフ

——なにをあたしが厭だといって？

——お前はいつも俺のことを、悪く思っている

——あたしが？ どうしてお前、そんなこといふのさ？

——俺がお前を面白く思はないってのは、余り、ものを詮索しすぎることだよ、世の中には女に用事のないことがある…沢山あるよ

(…)セレスチーナ お前の夢を見ているんだ…お前にそこ底惚れしているんだよ。だけど、あんまり、ものを訊きたがるものぢやアない。お前は、お前のことをすれがいいんだ。俺は俺のことをするから…そうしていれば、間違いないし、驚くこともない…

ジョゼフは近寄って来て、あたしの手を執った。

そのシャツの袖は、肘の所まで捲くしあげられている。太い柔らかな、通動機のように油ぎった、抱きしめるに工合のいい腕の筋肉は、白い皮膚の下に、力強く、敏捷に働く。上腕と上腕二頭筋の両側とに、燃えるような心臓や、花瓶の上に交叉された短刀なぞの刺青を見た。男性の、あたかも野獣のような強烈な臭気が、広い、鎧のように湾曲した胸から発散する。この力と、臭いとに陶然として、さっきジョゼフが馬具の金具を磨いていた台の上に、あたしは寄りかかった。グザビエさんもジャンさんも、その他の人々も、この残忍な獣のような顔をして、頭の光った、中老人が、あたしの胸に烙り（やき）つけたような強い印象はくれなかった。P118

——ジョゼフ、さア、すぐに一緒になって、ねえ、ジョゼフ ジョゼフ…あたしだって、お前の夢を見ているよ。あたしだってお前に夢中なんだよ

——すぐにさア…ねエ、ジョゼフ

■VOL.3

○十一月二十日下p 119

ジョゼフは予定の通り、昨日の朝、シェルブールに立っていった。

夜は明け放たれていた。空気は冷たかった。庭の向こうには、田野が、まだ、朝霧の濃い帳のうちに眠っている。遠くのほうに、目に見えぬ谷間から来る機関車の音が聞こえた。あの汽車こそ、ジョゼフとあたしの運命を運んでゆくもの。

○下p 121

「そうさ、旦那さ・・驚いたことは驚いたが・・実際、旦那は可愛い人、優しい人だね。」

「ああ、大満足さ。それも、身重になっていないのが確かなら、尚さら嬉しいんだがね・・あたしの年で・・情けな過ぎらアね！」

「どうでもいいさ・・もっと安心したいと思ったら、明日グアンさんとこに行くだけのことさ。」ねえ、マリアンヌ、たしかなの、お腹が大きくなったのは。」

マリアンヌは、お腹を撫でた・・祖の太い指は、腹の皺の中に、さながら、厭に膨れた護謨（ごむ）のクッションの中に入るように沈んで見えなくなった。

「旦那さ！」

「なあに、そんな心配は無いさ！旦那は奥さんの留守の時だけしかやって来ないし、あたしのところに長っ尻はしない・・それに洗い場からは小庭に抜けられるし、小庭の戸口は路地に開いてるから、一寸でも音がすれば、旦那は見付けられずに逃げられるって寸法さ・・万一、見つかったところで、どうしようもないじゃアないか。その時アその時さ。」

○下p 124

薄情な、虚栄心の強い、意気地無しを愛したという幻滅の外には何もありません。生白い病身らしい、眉字に皺のある顔の美しそうに見えるこの男を、どうしてあたしが愛したか・・この写真は気に障る・・いつも同じ傲慢な、また卑屈な奴僕らしい眼つきであたしを眺めている間抜けなこの二つの瞳を、あたしの目の前には置いとけない。ああ、厭だ！厭だ！

○下p 125

あの人は、きっと、小さなカフェーにいると思う。四辺を見渡し議論し計画を立て、姿見の後ろにある帳場、色々の配罫や酒蓋の閃きのなかで、あたしの姿がどんなものか想像しているに違いない。あたしを征服したように、町を征服して行き来するジョゼフを脳裏に描くため、シュルブルの街筋や、広場、港を識りたく思う。思いはライオンの森からシュルブルへ、クレールの死骸から小さいカフェーへ行く。ジョゼフの荒っぽい姿を、目の内に幻に見ながら、いつか眠りに落ちて行った。

○下p 127

ジョゼフはその手の触れる、一切のものに、自己の不可知性を与えるのだ。所持品全部が、みな持ち主の唇のように沈黙を守り、その眼、額のように見通すことの出来ないものばかり。

「鈍馬な奴だな、あまり物好き過ぎるぜ。さあ、もっと俺の肌着を調べな。鞆や魂の中をデモよ・・何も解りっこありアしねえぜ！」

○下p 129

口入れ屋は没義非道の巣窟、とって、貧すりゃあ、桂庵の門口をくぐるのも仕方がない。

窃盗、そう。何処を向いても窃盗ばかり。そして喰われる奴はいつも素漢貧で、喰う奴は何不自由のない手合いと定っていやがる・・とって、さてどうしたもの？・・憤って見たり、反抗しても、つまりは犬のように野垂れ死にするより、まだしも喰われ放題になって生きてる方が増しだということになる・・

○下p 129

(コリゼ街の桂庵は、) 入るとすぐ狭い急な階段、靴の裏にこびりつきそうな汚い階段、手にねちゃねちゃ不潔な欄干、そしてむっとする籠った空気、下水と便所の臭気、このまるでぐちゃぐちゃした幼虫か冷たい墓でも巣食っていきそうなじとつく壁

○下p 130

桂庵は、ポーラ・デュランという四十恰好な女が切り廻していた。軽く波うつ黒髪を真ん中から分けて結び上げ、ぐにやりとなった肉を、きついコルセットで締めつけていたが、老櫻の残りの香美しく、どここな

く威厳を持っていた。そしてその眼！・・・ホウ！・・・あの眼はご自慢であったに違いない！・・・いつも、黒い薄手の琥珀織の服を着て、張り切った胸に金鎖を下げ、褐色の天鵝絨の襟飾りを頸に巻きつけ、白い手をしたそのどっしり重味のある美しさは、十分な、というより寧ろ傲慢なほどの品位を現せていた。その女は、市役所に勤めているルイという下役人と同棲していた。・・・ルイさんはひどい近眼で、コセコセした挙措、いつも黙り屋の変物で、灰色の磨り切れたつんつるてんの背広を着て、ひどく野暮臭い、悲しそうな、ビクビクものの、若い癖に背の曲がっているこの男は、幸福ではないらしかったが、でも諦めきってるように見える。家に帰って来ても、手鞆を小脇に抱え、あかし達にも眼もくれないで、ただ一寸、帽子で挨拶するだけのこと、そして、足を曳き摺り気味にとんと幽霊のように廊下を滑って行ってしまう・・・可哀相に、あの人つかれてるんだ！・・・夜は、手紙を清書したり、帳簿をつけたり・・・それから・・・

○下p 131

「おや伯爵の奥様！・・・ほほ、そりゃアもう沢山おりますこってございますよ！お飾りもののお小間使いでございましたら・・・と申しますのは、何もしたがない、遊ぶより能のない、正直だか身持がどうかは、一寸、保証しかねるような女でございますが、これなれば、いくらでもお望み次第なんでございますが、忠実に働いて、針仕事をいたすし、何もかも自分の仕事を心得ている女は、当今は、もう見当たらないようでございます。手前方はもとより、何処へいらっしゃいまして、まアございません。へえ。」

○下p 133

奥様は、ご結婚あそばしていらっしゃいますのね？」

「まア！・・・お子さん方もいらっしゃいますのですね？」

「犬はお飼いですの？」

「お宅では、小間使いに夜更かしをおさせになりますでしょうか？」

「では、奥様は、夜分ちよいちょいお出かけ遊ばすのですね？」

「あの、お気の毒でございますが・・・」

「お宅は、あかし、虫が好きません・・・お宅のようなところは、何処もご免蒙ります。」

「お前、身持ちはどう？・・・情人（男）でも引っ張り込むかね？」

「で、奥様は？」

○下p 135

ビクトアールさん！・・・イレーヌさん！・・・ジュールマサン！・・・と、絶え間なく呼び込むおかみさんの声を聞くと、なんだか私窩子宿で客を待っているような気がする。

そのうち日は暮れて・・・夜が・・・昼間の暗さとさして変わらない夜が来る。喋り草臥れ、待ちあぐんだあかし達は、みな、黙ってしまう。・・・廊下には瓦斯の灯が一つとぼされる。五時になると決まってルイさんの少々背の曲がった白い影が、硝子越しに見える。身を廻しながら、ツと迅く通り過ぎてしまう。

○下p 136

私窩子宿の玉仕入の婆とか、品のいい容姿をした、どれも似たり寄ったりしている、丁寧な、尼さんめいた女衞達が、あかし達の帰りを待ちかまえていることがよくある。その女達は、四辺に気を配りながらあかし達について来て、巡査の監視の行き届かないシャンゼリゼーの茂った樹立の背後、薄暗い街に来ると、近寄って来て言葉を掛ける。

「うちにお入でなさいな！不自由な貧乏生活をしてないでサ。家じゃあ、楽しみでも、贅沢でも、お金でも・・・それに気候にやってけるよ。・・・家のお客さんは、主に大使達だから、粹な方ばかりで、その年とかお金の都合で、それぞれお好みがあるっていうものサ。一番出のご注文が、小間使風の人ってえの。きちんとした黒い服で、白いエプロン、さっぱりしたリンネル帽子っていう風さね。肌着は上等なのがいいね。ああ、だけど、まア三箇月契約の證書を入れてご覧・・・そうすれば、あかしの方であんたに、恋の支度はしてあげるよ、フランセー座の給仕女だって持ったことのないような、素敵なのを上げるがね・・・ほんとに。」

○下p 141

「ジャンヌ！・・・ジャンヌなんて女中の名じゃアないね、お嬢さんのような名じゃアないか。名は更えてもいいだろうね。」

「ブルターニュ生まれだね・・・あたしは、ブルターニュの人は嫌いさ・・・頑固で不潔だからね・・・」

「サン・ブリウ？じゃお前、ブルターニュ生まれだね・・・あたしは、ブルターニュの人は嫌いさ・・・頑固で不潔だからね・・・」

「まア！子供は無いだろうね？」

「子供なんて！・・・ちょっとお前さんに訊くがね・・・」

「育てることも出来ない癖に、子供をこしらえるなんて・・・悪魔でも身体に巣食っているんだろう・・・」

「《未婚女ジャンヌ・ル・コデックは、当家に十三箇月奉公し、仕事、品行、正直の点に於いて咎むべきもの無きを証明す・・・》・・・お決まり文句だよ。証明書なんて、何もなりゃあしない。」

「冬は仕事が少ないと思うのかね！梯子段、客間、旦那の書斎、・・・寝部屋は勿論・・・掃除して、火を入れるのは小間使いの役だよ・・・扉の取手や家具もよく磨き込んで・・・鏡もよく拭いて貰いたいね・・・家ではね、小間使いが、養鶏場の仕事をやるんだよ・・・」

「旦那のシャツの外は、小間使いが洗濯物をしたり火熨斗をかけたりするんだよ・・・あたしの着物の他は、仕立てに出さないんだから、裁縫もするんだよ・・・食事の時お給仕したり、下働きの手伝いして皿を拭いたり、床板に蠟引するのも小間使いの役目さ。それに家じゃ何もかも鍵を掛けてあるからね・・・」

「四十フラン！そんなべらぼうなお給金なんて訊いたこともない！好きなとこへ行くがいいよ！お前のような乞食女には不足しやしないから・・・束にするほど転がってらアね。」

○下p 151

この恐ろしい巴里、悪性の熱病に悩まされ押し合いへし合いしている巴里に迷い込んで来る田舎娘、これほど痛ましいものは無い。こんな娘を見るにつけ、思わず、自分の身につまされて、限りなく心を傷める。迷える者の行方は何処？・・・何処から来たのやら？・・・何で、生まれ故郷を離れたのか？・・・いかなる癡戯、いかなる悲劇、また如何なる嵐が、この怒号する人生の海の上に、悲しむべき小舟を押しやって、難波させたのであろう？

その女は醜い女、こんな完全に、絶対醜い、人間としての失格といたいほどの醜さに達しているのも稀。小柄で、胴長、四角張った胴体、平べったい尻、イザリと思われそうな短い脚。おでこで、雑巾で摩擦したような光の無い瞳、生まれつきぺちゃんこな、中央に切り傷のある、突端に行って急に高まった、荒い毛の生えている、黒い、丸い、深い、巨きな二つの穴の開いているゾツとするような鼻、それに加えて鼠色の鮫肌、死んだ毒蛇のような皮膚、明るみで見ると、粉がふいているよう。

○下p 153

その態度がまたぶざま。一足歩くにも何かにつぶかかる。執ろうとすればものを落とす。腕を家具に引っ懸けて上の物を一つ残らず砕いてしまう、歩けば肘で人の胸を突いたり、足を踏んだりする。すると太い呻くような声で詫びるのだが、これが死骸の臭い。たまらぬ臭い息を人の顔に吹きかける。・・・控え室に入ると、あたし達の間には激昂した不平の喧騒が湧く。それは、やがて侮辱的な罵声に変わり、遂には唸り声となってしまふ。この哀れな生物は、罵声を浴びて部屋を横切って行く。そして女たちに、球のように突き飛ばされながら、部屋のどんづまりの腰掛に、短い脚で転がり込むように腰をかける。女たちは、いかにも厭といわんばかりに、顔を顰めながらハンケチを揚げて、後退りする振をする・・・すると、その陰惨な女は、沈黙して呪われたように、文句を云うのでもなければ、反抗もせず、自分が侮辱されていることをさえわからないらしい風をして、あたし達とその女とを隔てる、伝染病警戒地帯とでも云うように、急に出来た空間は身を据えて壁に凭れる。

どうしても人間の声じゃアない。・・・何か嘯のような、嘎れた、震えたもの・・・ごぼごぼと鳴って落ちる雨水のような、何かこころがるもの。

「家にいるとね、お父ツあんに打たれるし、おっ母さんにも打たれるし、妹達にも打たれるし・・・みんな、

寄ってたかってあたしを打つんですもの・・それに、何もかもあたしにさせるんですもの・・」

「どうしてって・・打ちたいからでしょう。何処の家にも、打たれるものが、いつも一人いますね・・どうしてだかわからないけれど・・」

-あたしがあなただったら、故郷に帰ってしまうんだけど

「いいえ、厭・・故郷には帰りたくありませんわ・・もし帰ろうものなら・・あれはものにもならないとか、雇い手が無いとか・・馬鹿にするに決まってるわ・・厭、どうしても厭・・国になんか帰れない・・帰るくらいなら死んだ方がいいわ・・」

○下p 153

その態度がまたぶざま。一足歩くにも何かにぶつかる。執ろうとすればものを落とす。腕を家具に引っ懸けて上の物を一つ残らず碎いてしまう、歩けば肘で人の胸を突いたり、足を踏んだりする。すると太い呻くような声で詫げるのだが、これが死骸の臭い。たまらぬ臭い息を人の顔に吹きかける・・控え室に入ると、あたし達の間には激昂した不平の眩きが湧く。それは、やがて侮辱的な罵声に変わり、遂には唸り声となってしまう。この哀れな生物は、罵声を浴びて部屋を横切って行く。そして女たちに、球のように突き飛ばされながら、部屋のどんづまりの腰掛に、短い脚で転がり込むように腰をかける。女たちは、いかにも厭といわんばかりに、顔を顰めながらハンケチを揚げて、後退りする振をする・・すると、その陰惨な女は、沈黙して呪われたように、文句を云うのでもなければ、反抗もせず、自分が侮辱されていることをさえないらしい風をして、あたし達とその女とを隔てる、伝染病警戒地帯とでも云うように、急に出来た空間は身を据えて壁に凭れる。

○下p 161

老婦人がルイズ・ランドンを訊問していた。卓の傍にはポーラ・デュランのおかみさんが勿体ぶって立っていた。この下卑た場所で、三人の下品な女が落ち合っている・・三人の女がそこにおいて、顔を見合っている

「おや、まア、お前さん、なんて小っぼけなんだい！・・」

「まア、きたない人だねえ！」

「本当に、こんなに醜い人間が世の中に入るものでしょうかね？・・」

「まア不思議だね・・お前さん、もう見好くなったようだよ・・もう、お前さんお顔に見慣れたんだね・・」

「まア！お前さん、どうしたんだね？・・どうしてそんなに臭いんだい？・・身体に腐ったところもあるのかね？・・厭だね？・・こんな臭い人があるのかしら・・大方、鼻か、肩に、癌でも出来てるんだろう？・・」

「それが大瑕なのでございます。それですから、いい奉公口を取り外すのでございます。」

「あきれたね！・・ほんとにさ！臭いにもほどがある・・これじゃア、家じゅう臭くなってしまふ・・傍へよらないでおくれ！・・これじゃあ、前の条件じゃあ駄目・・お前さんを気の毒に思ったが、いくらあたしが同情してみたって、これじゃア仕方がないね・・とても駄目！」

「ですが、いかがなものでござんしょう・・そこをご辛抱あそばしては・・きっと、この可哀相な娘は、一生ご恩にきることと思いますが・・」

「恩に着てもらったところで、この厭な臭が癒るわけじゃあるまいし・・精一杯出して、十フランより出せないね・・厭ならそれまでのことさ・・」

-いいえ！・・それでは困ります・・厭でございます・・

「まア、お聞きなさい・・ルイズさん・・ご奉公するんでしょう・・でなけりゃア、あたしは、もうあなたのお世話はお免です・・他の家で口をお探しなさい・・もう。」

「そうとも、十フランだって、恩の字だよ、お情けで、それだけ出すんだもの・・どうしてこれがいい口だという合点がゆかないんだね？あたしの方じゃあお前さんを連れて行って見たところで、他の人同様、きっと後悔の種だがね・・さあ、一緒に行こうか」

それっきり、ルイズを見ない。

○下p 171

「巴里から大して遠くない田舎に、大変な金持ちで、独り者の老人がいるんですよ。家政婦として、その屋敷にいて貰いたいんですがね・・」

解き難い人生の皮肉からか・・・でなくば、原因の解らない愚かな自家撞着からか、とも角、あんなに戀がれていた幸福、しかも現在自分の現前に現れた幸福を、断然、拒絶してしまった。「助平爺・・・おお、厭だ！・・・もう結構。男ってものは、爺でも、若造でもみんな、あたしもううんざりよ・・・」

○下p 173

ブルジョアの食食に供せられる人肉の市場・・・永久に流れ流れて行く哀れな漂流物、難破船の残骸・・・この惨めなあたし達を漂わす汚辱の満潮と不幸の干潮・・・ああ！

○下p 175

夕方頃、大分遅く、誰か扉を敲く。あたしは酒に酔って、半裸体のまま、寝台の上に身を転がしていた。あたしは叫んだ。

「どなた？」

「手前です・・・」

「お前さん、だれだい？」

「給仕です・・・」

あたしは起き上がって、肌着から胸を出し、乱れた髪を肩に濡らしたまま、扉を開けた。

「何か用？」

給仕はニヤニヤ笑った・・・この男は、幾度も階段で出会ったことのある、いつも、変な眼付であたしを見る、髪の色、大男。あたしは繰り返して訊いた。「何か用？」

給仕は面食らって、まだニヤニヤしていた。そして、油で汚れた青い前垂れの端を、太い指で丸めながら、吃った。

「あの・・・手前・・・」

そいつ、あたしは給仕を帰した・・・あたしは、今だにその名さえ知らない！

○下p 182

「もひとつ、お前さん方にとって置きたいのは、家では、子供は絶対にお断りするから・・・お前さんがたに子供が出来るようなことがあったら、仕方がないが、早速出て行ってもらいます・・・子供は真っ平です！泣いたり、何処でも駆けずり回ったり、何でも荒らしたり、馬を脅かしたり、伝染病を持って来たりしてね・・・厭厭・・・子供をここで生んじやア困ります・・・これはお前さん方に、前以て断って置くから・・・そのところをよくして・・・気をつけて下さいよ・・・」

折しも、伯爵夫人の子供の一人が転んで、泣きながら、夫人の裾に絡わり（まつわり）、甘えに来た。夫人はその児を抱きあげて、優しい聲で揺すって、あやしてやり、情深く接吻してやった。機嫌のなおった子供は、ニコニコ笑いながら、他の子供のところに戻って行った。噫、喜楽とか、愛情とか、恋愛とか、母性というものは、ただ、富豪のためにのみあるのだろうか？

「貧乏人は、子供のいない方がいいからね・・・」

「いかにもそうで、はい・・・」

亭主の目は、石婦になるか、さもなくば、嬰兒殺しの犯人になるように、自分が、今、運命づけた女の腹の辺を注視していた。

女房は、コルセットを緩めた。久しく押しつけられていた腹は、緩んで、膨らんで、その特徴的な丸み、母性の弱点、罪悪を示していた。

「お前さん、どうして黙ってたのさ、・・・あたしが身持ちだってことを・・・」

「だってお前！いつかのように追っ払われねえようにさ・・・」

「でも、今日明日にはわかるこっちゃアないの！」

「お前も女なら、今夜にでもユルロー小母さんのところに行くがいいぜ。あの人は薬草を持っているから！」
女は、涙ながらに、喘ぎながら行った。

「そんなことおいしいでないよ・・・後生だから・・・そんなことしちやあ大変だよ！」

「じゃあ、俺っちゃあ死ななきやならないぜ・・・畜生！」

○下p 185

「俺は、今、一人ぼっちになった。鼻もなければ餓鬼もない、何もありません！俺は、どうかして仇をとってやりたいと思った。・・そうだ、芝の上で遊んでいた三人の小倅を殺してやろうと、永い間、思った。だが、俺には、出来なかった。・・しょうがねえじゃねえか？怖いんだよ！・・卑怯なんだね・・人間て奴は、苦しいことを辛抱する勇気だけしか持ってねえんだよ。」

○下p 189

ジョゼフの帰りが待遠しい！運命のもたらす希望と恐怖とを知る刹那を待っている！ああ、ジョゼフが、成功しようと失敗しようと、心変わりがしようとしまいと、覚悟は、もう定まっている。あたしは、もう、ここにはいたくない。・・あともう、数時間。ただ一夜だけ過ぎれば、あたしの将来は定る。

その連中は悪徳によってのみ、生きている。否、生きているような幻影を与えているに過ぎない・・いわば、木乃伊を支えている細紐のように、支えている悪徳、それを奪ってしまえば、残るものは、もはや幻ですらなく、ただ、塵埃と灰燼（かいじん）・・死だけ

○下p 193

「お前さんの来方が遅いと、何だかあたし、気が気じゃないんだよ。遅くなっちゃア厭だよ。お母さんにそうおいよ、家を留守にするのが続くようなら、もう何も上げませんって・・」

「どうしてこんなに綺麗なんだろう、可愛い顔、ああ、他の人にアやりたくないよ・・おや、どうしてあの綺麗な黄色い靴を履いて来なかったの？お前さんが、ここへ来る時には、どこからどこまで、隙の無いようにさせたいんだよ・・。ああ、お前さんの眼、・・色っぽいぱっちりした眼でさ、憎らしい人だね、この眼で他の女を見たことがあるに違い無いんだからね・・それからその口・・その口でさ！・・どんなことをしたか、わかりアしない！」

「冗談いっちゃ困るぜ！そんなことア、ありっこ無いよ、嘘はつかないよ・・本当にお母さんは、用達に出かけたんだよ！」

「まあ！憎らしい人・・憎らしい人ね・・他の女を見ちゃア厭だよ・・その可愛い顔も、口も、・・そのぱっちりした眼も、みんなあたしのものだよ、お前さん、私を可愛がってくれるねえ、ええ？」

いじらしいユージニーに姉妹のような愛を感じた。・・若者は、グザビエさんにいたところがあつた。・・この綺麗な二人の男の間には精神的の類似点があつた。・・そして、この似通っていることがあたしに寂しい思いをさせた。限りなく悲しませた。

○下p 195

奥では、雇人たちの使い方を知らないばかりでなく、文句の出るのに、怖じ気をふるい、小言をいおうとしなかった。時としては、あまりに明白な、厄介な手ばかりがあると、漸つとの思いで、《何々をやっていないようだね》と吃するようにしているのが関の山。そういう時には、横着な洒洒とした調子で、《奥様、失礼でございますが、奥様のお考え違いではございませんか・・でも、お気に召しませんようでしたら》といいかけるばかりのこと。すればそれっきり、お小言なし。こんなに押しの利かない、これほど嘸馬な主人に出会ったことがない！

○下p 199

「そりゃあ、雑作ないことです・・賭博に勝つと同じことで、解っちゃえば変哲もないものです・・まあ、こうするのですナ・・毎朝、私は給仕を十五分ほど、駈けさせるんです。そうすると汗を出すでしょう。いったい、汗には脂を含んで居りますから、その汗を、地の緻密な絹布で額から拭きとって、それで、帽子を磨かせるんです。そして、了いに、鍔をかければいいんです。ですが、綺麗好きな丈夫な男を選ばなければなりませんね・・栗毛の髪の方がいいんですがね・・何故と申さば、黄金色（ブロンド）の髪の方は、どうかすると厭な臭いがしますからね・・とにかく、どんな汗でもかまわないというのではございませんよ・・昨年、英国の皇太子殿下に、この処方方を献上して置きました・・」

○下p 202

主人のボルグスハイム男爵は、エドガーが非常にご自慢で・・十万人の門番を破産させるような投資事業

よりも、この方を、遥かに、自慢していた。男爵は丁度、絵画の所蔵家が《おお、うちのルーベンス》、といって喜ぶように、エドガーに対して、反り身になりながら、優越意識のある調子で、《おお、うちの調馬師！》とやる。けれど、実際、この幸福な男爵が自慢をするのも無理はない。自分の名声と尊敬が著しく増したからである。・エドガーのために、久しく憧憬れていた、接近し難かった客間にも出入りし得るようになったし、また、自分の血統に対する社交界の反感をも抑えることが出来たのだから。クラブで、《英国に勝った男爵の有名な話》が問題に上がったことがある。・英国は我が国から埃及（エジプト）を奪い去った。しかし、男爵は、英国から、エドガーを奪い取った。・そこで、英仏の均衡を復活することが出来たわけ。・インドを征服したとて、こんなに賛美されることはよもあるまい。ところがこの讚美には、執こい嫉妬心が伴わずにはいなかった。ある者は男爵からエドガーを横取りしてしまおうとさえした。エドガーは、まるで貴婦人でもあるように、奸策、陰謀、媚などに囲まれたもの。新聞などは、崇拜と感激との余り、エドガーと男爵と、どっちが調馬師で、どっちが銀行家か差別（けじめ）がなくなってしまった。そしてこの両者を、相互の栄光に対して混同して同一の讚美を呈してしまった。

○下p 208

「貴婦人なんて、いい料理に使うソースのようなものさ。・作るところを見ちゃアおしまいだ、・どうかしようなんて気にはなれなくなるね。」

奥さんは、異常な不思議な欲張りを示すことがあった。ただ、ニースのサラダにも文句をつけたり、台所の掃除費を惜しんだり、三フランの請求書を拒んだり、辻馬車に乗る時は、いつも馭者と罵り合い、何とか難癖をつけて、賃金を値切った。

○下p 210

ウィリアムは田舎が嫌い。野原や樹の間や花の中は倦怠の種。・自然というものも、酒場や馬券や、競馬騎手が射手こそはじめて辛抱が出来る。生粋の巴里っ子。

「花だって？花つてものはね、帽子の上についてるか、帽子屋にでもなければいいものじゃアないよ。小鳥だってそうさ、なんでえ、まるでがなり声で歌を唄っている餓鬼のように朝っぱらから煩くって、寝られやしない！ああ厭だ厭だ。田舎なんて俺は大嫌いだよ。・田舎なんて百姓ででもなけりゃア、いられやしねえや。」

○下p 217

「わかったかい、セレスチーナ。・俺たちは自分たちの仕えている人間よりも、強くならなけりゃア駄目だ。・出来るだけうまい汁を吸うってことよ。・利口でよく気の廻る人間に雇われてるのは、そりゃア、してやられるこったぜ。・俺は、主人の悪口を並べたり、主人達を困らせたり、嚇かしたりして暮している奉公人があると思うと、ああ、こなれていねえ畜生達じゃねえか。・中には、主人を殺そうなんてする奴さえもあるんだが、殺して！それからどうなるんだい。・牛乳を飲ましてくれる牛や、羅紗をくれる羊を殺すかい？器用に、おとなしく、乳を搾ったり、毛を刈ったりするものさ。」

○下p 222

「貴方はあたしなんかどうだっていいのね。あたしもやっぱり馬鹿ですわ。綺麗になるように気を揉んだり、なるだけ貴方の気に入るようなものを見つけようなんて。・だのにあたしのことなんてお構いなしなんですもの。・いったいあたしは貴方のなんなの？何でもありゃアしない。・何でもないのね！ここへ入らして。・何をご覧になるの？こんなくだらない雑誌なんか。・何を面白がるかと思えば、判じ物だなんて。・ああ！あなたがあたしにさせて下さる生活ったら、ほんとに結構なものですよ。・人を訪ねるんじゃアなし、まるで娘みたいな生活だわ。・貧乏人みたいだわ。」

「ねえ、ねえ。・頼むから。・そう怒らないでね。・そう、貧乏人のようにさ。・。」

「煩いっていうのにかまわないで頂戴よ。・傍に寄らないで頂戴。・本当に、利己主義者だったら。・馬鹿太りめ。・あなた、あたしに何もして下されないのね。・なんて意気地なしなんだから！」

「何故、そんなこというんだい・・・狂人だね、まア、そう怒るのはおよしよ・・・いかにも僕が悪かった・・・そのコルセットにすぐ気が付く筈だったんだ・・・この綺麗なのにさ・・・どうして気がつかなかったんだろうね？全くわからない！・・・こっちをご覧！笑っておくれ・・・よう、実に素晴らしい・・・素敵に似合ってるよ！「まあ、お前、そりゃア無理というもんだよ・・・コルセット一つで・・・何も関係のないこっちゃアないか・・・さあ、こっちを向いて・・・笑ってご覧・・・コルセットで喧嘩するなんて、馬鹿らしいじゃアないか・・・」

「ああ、煩い！煩い！煩い！・・・出て行って下さい」

「馬鹿！畜生！うるせいつたらそっちのこったイ！いつもその手だ・・・何かいたりしたりすると。まるで、犬同然に扱いやがる・・・きまって、乱暴な、無作法なまねをしやがって・・・こんな生活はもう真っ平だ・・・裏店の嬢アみたいな仕草にも飽き飽きした・・・何をいって貰いたいんだ・・・コルセットだって・・・よしいってやろう・・・見ともないよ。ああ、コルセットは・・・何だい、白首のコルセットじゃアないか・・・」

「意気地無し、よくもそんなことがいえるね？そんなこといえた義理かい？あん時はどうだったい、お前さんを泥の中から引っ張り上げた時は。見すばらしいざまったらなかったじゃアないか・・・倶楽部じゃあ札つき者になったし、借金で首が廻らなかつたじゃアないか。そんな大きな顔していなかつたね！名がなんだい？爵位がなんだい？結構だよ。高利貸しだって、お前さんの名や爵位をかたに鏝一文だって貸すこっちゃアない・・・欲しけりゃアいつでも返すよ。ああ、それでお尻でも拭くがいいや・・・貴族だ、先祖だって鼻にかけて、あたしが買ひとつで食べさせているこの人がさ！貴族なんてなんにもなりゃあしないじゃアないか・・・悪いぐらいだ・・・ご先祖だって、ふん、質に入れても、老いぼれた兵隊や折助面に免じて、十スーがとこ貸してくれればめつけものさね。誰が、誰が・・・貸すもんか！・・・お前さんなんか、銘酒屋這いりが相当だよ、詐欺師め、淫売屋の親父！」

○下p 227

「何でもございませぬ・・・でも、その奥様の仰ることがおかしくって・・・ばかばかしくって・・・ホホホ・・・ハハハ・・・ほんとにばかげってますわ！」

勿論その晩、あたしは、この家を去って、またもや街路をうろつく身になった。
惨めな生活！情けない職業！

○下p 228

何が何やらわからなくなつて、人殺しをもしかねまじくなる・・・あの日、何故、あの女を殺さなかつたらう？・・・どうして、あの女の首をしめなかつたらう？・・・

○下p 231

「セレスチーナ、生きて行くには、身持ちがよくなくっちゃあいけないよ。それに俺のように臨機応変でことが肝心だということがわかってるかね・・・お前は、身持ちが悪いし、臨機応変だつて下手だ・・・お前は、すぐ感情に走ってしまうから駄目だよ・・・感情って奴は、俺たちの身分には大禁物だ・・・《浮き世は浮き世だ》ってことを覚えていなよ！」

○下p 234

行く人がみな幽霊のように思われた。遠くから、丁度、暗夜の燈台のように、また、日に映える金色の円屋根のように、輝く帽子を冠った紳士を見かけた時には、心がハッと波打つた・・・が、それは、ウィリアムとは、てんで違つた外の人・・・錫のような色をした低い空の何処にも、一つの希望も煌めいてはいなかつた。

○下p 236

もう、朝の二時・・・火は消えかかっている、ランプの火も暗くなつた。けれど、薪も油も持っていない。寝よう・・・だが、頭の中が非常に熱いので眠れそうにもない・・・自分のほうに近づいて来るものでも夢見よう・・・外は、夜が森々と静まり返っている・・・骨を刺すような寒さが、まばたく星空の下で、大地を凍らしている。ジョゼフは、今頃、何処かを通っているに違いない・・・虚空を通じて、ジョゼフが汽車の一室にもっともらしい容姿をして、考え込み、大きな身を凭せているのが、まざまざと見える・・・あたしに対して微笑んでいる・・・あたしの方に近寄つて来る・・・遂に、平和と自由と幸福-幸福?-とをあたしに齎して来るんだ・・・

明日は会える・・・

日付無し（八箇月間というもの、唯の一行も日記を書かなかった）

○下p 237

海から生まれたあたしは、また、海に帰った。さほど海を恋しいとは思わなかったが、さて、帰って来てみると、やはり、嬉しい。あのオーデイエルヌの寂寥（せきりょう）とした景色、あの海岸の茫漠とした陰惨な気分、激しい絶叫を響かす渚のもの凄まじさとは全く趣が異なって、このシェルブールでは、あらゆるものが悲哀を帯びてない。総てが歓喜に充ちている・・・軍港町の賑やかな響き、美しい動き、軍港のごたごたした忙しなさがある。色を漁る水平の群れが、剣を鳴らして通る。長い航海と航海との間の、享楽を急ぐ水夫の群れ、絶えず移り変わる、興深き眺め・・・そこにあたしは、おさな時代にはつれなく思われていたものの、なお常に心離れぬあの故郷の空の藻草とコールタールの匂いを吸う。

○下p 239

-奥様-旦那様-早く降りて来て下さい。泥棒です泥棒。

「どうした？・・・どうした？」

-泥棒です。泥棒です。

「泥棒？何を盗られた？」

「まア？まア！」

「何を盗られた？・・・何を？」

「あたしの道具が！・・・まア！・・・どうしたっていうんだろう？・・・あたしの道具が？・・・」

「すっかり盗られた！・・・すっかり！・・・ルイ十六世の薬味入れまで。」

「ルイ十六世の薬味入れ！・・・ルイ十六世の薬味入れ！・・・ああ！泥棒め！」

○下p 240

「あたしの道具が！・・・まア！・・・どうしたっていうんだろう？・・・あたしの道具が？・・・」

「すっかり盗られた！・・・すっかり！・・・ルイ十六世の薬味入れまで。」

「ルイ十六世の薬味入れ！・・・ルイ十六世の薬味入れ！・・・ああ！泥棒め！」

○下p 241

その犯行は、もの凄いの、荘重な、審判的、宗教的なあるものを持っている。それはあたしの心を震撼させたが、同時に・・・なんといおうか

あたしの感じたものは、ただあたしの肉体のみに作用し、熱せしめたに過ぎない。いわば、自分の肉体を狂暴に動揺された時の、苦しいけれど、また気持ちのいい感じ、暴行される婦人の心理といったもの。これは不思議な、特別な、また勿論、恐怖すべきことではあるが一そして、こうした変な強い感覚の真因をなんと説明する術もないが、一あたしの心の裏では、総ての犯罪、就中（なかんずく）、殺人罪は、恋愛とある秘めやかな共感を持っている・・・そう・・・。立派な犯罪は、偉丈夫のようにあたしの心を捉える。

○下p 242

ここに、土竜か幼虫のような生活をしている二箇の生き物がある。・・・獄舎の人となっているものがある。彼らは、この高い壁の牢獄の裏に我と我から身を閉じ籠めている。人生の快樂、家庭の微笑なぞは要なき冗物として、捨ててしまう。自己の富の言い訳となるもの、自己の人としての無能性の弁解となり得るものを、汚いものとして遠ざける彼らは、そのけちな食卓から、麵麩屑一片れさえ、貧者の上のために落とさない。枯渴した心臓はもだえるものの苦しみに、何一つ落とさない。自己の幸福さえをも節約する。彼らの財産の一部を奪い取って、空しく埋められていた財宝を大気に晒したお泥棒様こそ、世の中の平行を回復したもの・・・

○下p 247

ジョゼフが、この大層な略奪に関係しているという考えは、直ちに、頭に浮かんで、それが今では、強まったものになって来た。シェルブールへの旅行と、この巧妙な犯罪の準備との間には、たしかにある関係が

結ばれていよう。

あたしは、この予感を消そうとはしなかった。反って非常な喜びをもって、その予感を楽しんだ。

「ねえ、ジョゼフ、小クレールを森の中で殺したのはお前でしょう？・・それから、奥さんの銀器を盗ったのもお前だわね？」

ジョゼフは、あたしをじっと見つめ、突然、返答もせずに、抱き寄せて、棒で撲るような力の籠った接吻を、あたしの襟足に与えながらいった。

「お前は俺と一緒にあの小さな珈琲店を出すんじゃないか、・・それに俺たち二人は、同じ心をもっているんだからな・・」

○下p 248

「ねえ、ジョゼフ、小クレールを森の中で殺したのはお前でしょう？・・それから、奥さんの銀器を盗ったのもお前だわね？」

○下p 249

「怪しいのはあの小間使いきりです。あれの身元は私もよく知りません。きっと、巴里に何か悪い者でもいるのでしょうか、ふだん、よく巴里へ手紙を出しています。家の葡萄酒を陰で飲んだり梅干しを盗み食いつたりしているところを、幾度も見たことがあります。主人の酒を飲むような者は、何でも仕兼ねませんからね。」

「巴里の女なんか雇うものではございませんね。ほんとに怪しいところがありますよ。」

○下p 251

犯罪の告白のようにあたしに接吻したあの晩、ジョゼフの信頼が情欲と一緒にあたしに向かって来た晩以後にあっては、ジョゼフは事実を否定した。いかに罍をかけても、優しい狎れ狎れしい言葉と愛とで、鎌をかけようとしても無駄だった。あたしには、この不可解な男をどう思っているかわからなくなった。ある時はその無実を信じた。ある時は犯人と信じた。そして、これがあたしを苦しめた。

○下p 253

「俺たちが出て行くのを、奥で泣くようではなけりゃア・・」

○下p 255

自分の気持ちが、ほんの束の間の好奇心じゃアないかしらということ。ジョゼフはあたしの肉体と一緒にあたしの魂をも捉えたけれど、それが永続きしないように思われた。あたしの方にしても、刹那の感情の迷いに陥っているような気がした。ジョゼフという男は、ただ鈍重な田舎者で、素晴らしい犯罪や暴行なんぞやることの出来ない男ではあるまいか・・自分が考えるようなジョゼフを作り上げたのは、変わった夢を追おうとする心に駆られた空想ではあるまいか、なぞと自分に訊ねる折もあった。こうしたことになった後のことが怖かった。

不可解なことだが、もう再び他人の家に奉公が出来なくなったということが、ある未練を感じさせた。自由の身になる日を雀躍して喜ぶこととと思っていた。

召使いには召使いの血が流れているもの。ブルジョワのあの贅沢な態が、俄にあたしの眼前から消えてしまったら？労働者の家のように、冷たい貧弱な九尺一間、綺麗なものや手触りも心良い衣服や、まるで香水のお湯にでも入っているように、いい気持ちになって、手練手管で綾つる美貌の悪徳の持ち主なぞから、すっぱり無関係になって送る平凡な生活、

○下p 256

はじめて、ブリューレへついたあの雨模様の灰色の寂しい日に、あれほど侮蔑の眼であたしを見守った、むっとりだんまりの妙な男と、今日、夫婦になろうとは。

○下p 257

あたしの心配していることを訊ねても、その言葉がわからないような風をする。そして、その刹那の眼には、昔のように、薄気味悪い閃光が走る。永遠にジョゼフについては何も知り得まい。この不可解の点が、あたしをジョゼフに結びつけたのであろう。

○下p 258

彼の方で、「仏軍歓迎」という看板が、昼は大きな金文字で、夜は赤々とした火の文字で町の上に輝いている。この小さなカフェーは、今やこの市の愛国者や反猶太主義者の集会所になっている。彼等は、酒間に、陸軍の下士や海軍の将校と友誼を保つために集まって来る。血塗れ騒ぎも、もう、数回あった。下士達は何でもないつまらないことに剣を抜いて、仮想の国賊を威嚇する。。ドレフユウスが仏国に上陸した晩などは《軍隊万歳！・・・》《猶太人をやっつけろ！》といった喚きに、この小さなカフェーがひっくり返りゃあしないかと心配したくらい。既に、町に顔の売れていたジョゼフは、この晩、大成功を得た。ジョゼフは、テーブルの上に昇って、大声で怒鳴った。

「もし、国賊が有罪ならば、即刻、追放しろ、無罪ならば、即刻、銃殺しろ！」

「そうだ、そうだ、銃殺しろ！軍隊万歳！」

○下p 260、261

「アルザス風の髪形が似合うぜ、どうだい？アルザス風の髪に結っちゃあ・・・すると会計台が素敵になるんだがなあ。」

「戦争の時にゃあ、綺麗に、着飾ったアルザスの女を見ると、誰の心も昂奮して愛国心が湧き上がるんだ。愛国心ほど人を酔わせるものはないからね。お前の写真を新聞に出させよう・・・それからポスターにもなア。」

ジョゼフの考え込んでいる姿を見る度にあたしの心は燃えるようになる。悲劇の一場面を想像する、闇夜の逃走、掠奪、短刀のきらめき、森の灌木の上に喘いでいる人達を・・・

○下p 261

あたしにはジョゼフの心に逆らうことは出来ない。ジョゼフは悪魔のように、あたしをしっかりと掴んでいる。あたしはジョゼフのものであることを、いっそ幸福に思っている。ジョゼフの命令のままに何でもしよう、何処へも行こう・・・たとえ罪悪の中までも。